



「見たり、聞いたり、探ったり」No.310

通算 No.461

青木行雄

東京都指定無形民俗文化財 世田谷の「ボロ市」で江戸城天守再建署名活動

我が「江戸城天守を再建する会」では広範囲に天守再建の為の署名運動の活動を続けている。その一環としてこの程、世田谷の「ボロ市」でその一角を借りてテントをはり、署名運動をさせてもらった。

当会では今「衆議院議長」、「参議院議長」宛に一般の方に署名をお願いしながら、目標は20万筆とし、天守再建の為にあちこちと場所を変え頑張っている。

世田谷の「ボロ市」とは、知らない方に

場所は世田谷区の代官屋敷を中心に2～3kmに広がり、店舗700～800軒はあるのか、すごい件数である。私が行ったのは東急田園都市線で三軒茶屋駅で下車、東急世田谷線に乗りかえ上町駅で下車、会場へ向かった。

毎年12月15日、16日と1月15日、16日に開催されるこの「ボロ市」は、1日20万人の人出と言われているが、たしかに多く、通りはどこも満員電車の中と思われる場所が多くあり、代官屋敷通りがメインのようで、小、中学校や大人の楽団、笛、太鼓、などイベントで、通りは大変にぎやかに盛り上っていた。

この「ボロ市」のはじまりを調べて見ると、ボロ市のはじまりは、遠く440年の昔に開かれた^{らくいち}楽市にさかのぼるといふ。当時関東地方を支配していた小田原城主北条氏政は、世田谷城主吉良氏朝の城下町である世田谷新宿に、1578年(天正6年)に楽市を開いた。楽市というの^{うじまさ}は、市場税を一切免除して自由な行商販売をみとめるというもので、毎月1の日と6の日に月6回開いていたので6齋市ともいわれた。



三軒茶屋駅から出る東急世田谷線の電車。東急田園都市線の三軒茶屋駅から東急世田谷線の三軒茶屋駅の乗りかえが不便であった。



祝ボロ市のカンパンが見える。伝統440年と書かれている。すごい伝統の市である。



御代官所とあってすごい伝統の代官屋敷である。ボロ市の中心はこの代官所のようなのだ。



我々の「江戸城天守を再建する会」のテントで署名に頑張っている会員達である。



(株)阿部清商店・阿部社長の出店の風景である。常に5～6人を相手に頑張っていた。



中華せいろと書かれている。こんな店が600店～700店とあるがすごい。

当時世田谷は江戸と小田原を結ぶ相州街道の重要な地点として栄えていた。この市により、これらの地方の物資の交流はいっそう活発になり、江戸と南関東を結ぶ中間市場としてかなり繁栄したようである。

ところがこのようなにぎわいも、北条氏が豊臣秀吉に滅ぼされ、徳川家康が江戸に幕府を開くにおよんで急速におとろえていく。そして世田谷城が廃止され、世田谷新宿が城下町としての存在意義を失い、楽市はなくなったが、その伝統は根強くつづけられ近郷の農村の需要をみたす農具市、古着市、正月用品市として毎年12月15日に開かれる歳の市として長く保たれたようだ。明治の世になって新暦が使われてから正月15日にも開かれ、やがて12月15、16日の両日、正月の15、16日両日も開かれるようになり現在に至っているという。

江戸時代から明治にかけて、出店のスペースは、^{むしろ}筵1枚または戸板1枚分だった。店は、正月用品、日用品、農具、が多く、野良着つくりや^{わらじ}草鞋の補強用のボロや古着など、荒物、雑貨、どぶろく、駄菓子などあった。

現在はボロや古着にかわって、掘出し物を安価に手に入れようとする客を相手に、洋品、雑貨、食料品、漬け物、古道具、陶器、うす、杵、骨董、植木の店などが並んで賑わっている。中でもボロ市名物の代官餅には毎年長い行列ができていているという。



この様な楽団が「ボロ市」を盛り上げていた。



通の上部に所々にたれビラが下り、かざりを盛り上げていた。



上部につり上げて目立つように売られていた。



植木などもこうして売られている。

国指定重要文化財「代官屋敷」について

徳川三代将軍家光は、1633年(寛永10)、彦根藩主井伊直孝に世田谷領の一部を江戸屋敷の^{まかないりょう}賄料として与えた。直孝は、旧領主である吉良氏の家臣で、吉良氏が滅びた後帰農していた大場市之丞^{いちのじょう}を代官に用いた。以後大場家は明治維新にいたるまで235年間、代官をうけつぎ、この屋敷を住居兼役所として使用したという。屋敷は茅葺^{かやぶき}で寄棟造^{よせむねづくり}、建築面積は約230m²、玄関、役所、役所次の間、代官の居間、切腹の間、名主の詰所等があり、1737年(元文2)に建て直された古い建物である。庭には罪人を取り調べたという白州跡がある。興味のある方は、ボロ市の外にこんな場所もあり、世田谷の歴史が勉強出来る。

また、何よりもうれしかったのは新木場の我々の仲間、阿部清商店の阿部社長が毎年このボロ市の一角で大小いろいろと木材マナ板を販売し盛況である事だ。写真の通りである。いつも5～6人の客を相手に話を進めていた。

ボロ市の名の由来について

戦国時代に楽市として世田谷新宿に開かれた市は、徳川時代になって市町という名のもとに開かれていたが、後に農家の作業着のつくろいや、草鞋^{わらじ}に編みこむボロが安く売られるようになって、いつとはなしにボロ市の名が生まれたと言う。

ことに草鞋^{わらじ}をボロといっしょに編みこむと何倍も丈夫になるというので、農民は争って買った。大部分の農家にとって農閑期の夜なべの草鞋^{わらじ}作りは、大切な現金収入の副業だったのである。明治中頃までの市の最盛期には、ボロ専門の店が十数軒も出て、午前中にはほとんど売り切れたという。ボロを売る店の他に農具、日用品等の多種あったようだ。

昭和のはじめ頃から、見せ物小屋や芝居小屋も出店するようになった。商品の売買と共に娯楽の場にもなっていた。大正から昭和にかけて出店数は8～9百店から多いときは2千店にもなったと言うが、近頃は交通量の増大と共に出店数は7～8百店に減り場所もせばめられたという。そんなわけで古着類がわずかにボロ市の名を保っているとパンフに書かれていた。

こんなわけで我が「江戸城天守を再建する会」も連日この「ボロ市」の一角で道行く人に事情を説明しながら、署名運動に頑張った。1日でも早く再建を願っているよとはげましの言葉には頭が下るが、十人十色で反対もあり、苦勞もあるが、目標達成のために心身を尽くして努力を重ねている。興味がある方には協力をお願いし、1日でも早く再建を実現したい。

令和8年1月20日